

# 金魚のふるさと「郡山金魚資料館」 ～泳ぐ図鑑 金魚の水族館～

有限会社 やまと錦魚園



金魚の水族館

金魚養殖の生産性向上のため『高密度養殖技術』開発中

## 郡山金魚の歴史

金魚が日本に初めて渡来したのは、足利時代（文亀2年・1504年頃）であったが、国内で繁殖させることが出来なかった。その後徳川幕府が天下を平定して平和になった時代（元和2～5年・1616～19年）に再渡来したものが繁殖して現在に伝えられた。

郡山の金魚は、柳沢吉保の子吉里侯が甲斐の国から大和郡山の藩主として移封された時（享保9年・1724年）家臣横田又兵衛が観賞用金魚「珊瑚樹魚」を持参し邸内で飼育養殖したのが始まりで、士族の内職として1830年頃より盛んに飼育され、幕末大阪の商人より「蘭鑄」を手に入れてから広く世間に知れる処となった。江戸時代の末期から明治の初期にかけて付近の農家に伝えられて副業となり、水利と地の利の便を得て金魚養殖が盛んになり日本の主要金魚産地として発達した。第二次世界大戦中は、金魚養殖は中断したが、戦後復興して養殖面積5割、年間7000万尾の金魚が生産されて全国の40%のシェアを占めるに至った。養殖業者は約70戸。

## やまと錦魚園

やまと錦魚園は、昭和元年嶋田正治氏が創業、養殖面積3割、高級金魚展示池650坪と県内随一。先代嶋田正治氏が、昭和30年頃、当時国交が無かった中華人民共和国より金魚を輸入し、飼育・繁殖に努力を重ねた。そして自ら日本式（郡山）養殖方法を編み出し大量生産に成功し、今ではこれらの国産中国金魚（水泡眼・パール・茶金・青文魚・こ頂天眼）は、全国の小売店でよく見かけることが出来るようになった。

## 郡山金魚資料館～泳ぐ図鑑 金魚の水族館～

昭和57年には、全国初の「金魚泳ぐ図鑑 郡山金魚資料館」を自費で建設し、自営養殖場とともに全国の小・中学生に開放した。同館には、約40種類の金魚と金魚の父と言われた故松井圭一先生が収集された貴重な文献・浮世絵など数多くが展示されている。この金魚の展示を通じ、津軽錦、出雲ナンキン、土佐錦などの珍しい金魚や良質金魚を全国より集め、販売する事を始めた。この販売事業を現社長が引き継ぎ、今日では、中国・タイからも輸入し、“やまと錦魚園には無い金魚は無い”

と愛好家の皆様から言われるようになり、好評を博している。

## 金魚すくい

また、昭和55年より気軽に何処でも金魚すくいが出来るようにと全国の商工会、保育園、幼稚園に金魚と金魚すくい用具を送る事業を開始した。昭和60年に現社長が後を継ぎ、宅急便の普及も幸いしてこの金魚すくい事業を拡大するように努力した結果、今日では年間約5000件以上にも達する成長を見るに至った。当事業は、金魚を待ち望んでいる子供たちのため、必ず元気な金魚を決まった日に届けなければならないので、金魚が死んでいたり、到着がイベントに間に合わなかったりは許されない。したがって採算を考えずにチャーター便を使う苦勞も何度か経験した。



## 販路拡大、金魚のふる里会

この事業で培った苦い経験と、受注・発送・金魚の管理等のノウハウを最大限に生かし、現在では専門店・ホームセンターなどへの販路を拡大することが出来た。

また、平成3年より当園に通う愛好家の皆様と共に金魚飼育技術向上と、金魚文化の普及を目的とした「金魚のふる里会」を設立し、年2回の品評会と3回の研究会を行って、情報交換・飼育技術向上に研鑽を重ねている。

## 高密度養殖

平成14年からは、郡山の同業者数名とコラボレーション（共同研究）を図って「協同組合金魚研究会」を結成し、サイトビジネスサイトを立ち上げ事業化、夏場の金魚配送用包装形態の改善事業、平成21年から近畿大学農学部水産研究所のご指導を仰ぎながら金魚の高密度養殖実験事業などを精力的に推進し、金魚養殖の生産性向上と原価低減を図り、金魚養殖業の採算向上を最終的狙いとして実行中である。

## 有限会社やまと錦魚園



代表 嶋田 輝也

〒639-1021 奈良県大和郡山市新木町107

TEL 0743-52-3418

FAX 0743-53-3927

URL <http://www.kingyoen.com>

開発担当者：代表 嶋田 輝也